

『おくのほそ道』の花と恋と

松隈義勇

私はこの夏、紅粉の花を見た。目で見たのは、生れて初めてだった。文芸科一年の研修旅行のさい、奈良の春日の森にある万葉植物園に行ったとき、会津八一の「春日野」の歌の碑が立っている近くにある一株か二株に、乏しい花が付いていた。ものの本で読んでいたとおり、野にあるアザミの花を小さくしたようなかわいい頭状花で、色は赤みがかった黄色である。とげのある葉も茎もアザミに似ているが、草丈も姿もそれよりスマートな感じである。私はとにかくこの花を目にしたことでたいへん満足した。

それから十日ほどしてこんどは二年の芭蕉研究ゼミの研究旅行で『おくのほそ道』の跡をたどり、尾花沢市に行った。旅の芭蕉を世話した鈴木清風という俳諧をたしなんだ大商人の家がそのまま連綿と続いている、その自宅に連れて行ってもらったとき、庭にまたみごとにその紅花が咲いているのに会うことができた。尾花沢は昔は紅花の集散地として栄えた

町で、清風は島田屋八右衛門を名のり、紅花商として土地の豪商だった。江戸や京阪にも幾度となく往復した清風は、芭蕉をこの旅にさそった一人だろうといわれる。清風に対する挨拶をこめて紅花をよんだ句が芭蕉にもあるし、そういう因縁を思っただけでも鈴木家としてわざわざ紅花を仕立てているということであった。鈴木家で紅花を見たということで、また感慨も新ただった。

その庭内の紅花はほとんど一畑分ほども作ってあったから、鮮かな赤と黄のまじりあった無数の小型の花が、緑色の生き生きした葉や茎の先に群り咲いているありさまは、決して、けんらんともいいたいほどで、艶麗と清楚という二つの違った要素をいみじくも秘めつつ、可憐な美しさはまた言おうようななかった。エジプト原産というだけに、感じは総体にエキゾチックで思ったより近代的でもある。

ベニバナは、クレナイ(呉の藍)とも呼ばれ、古くから染

料や顔料の原料として栽培されてきたキク科の草本植物である。『古今集』や『源氏物語』などに出てくる末摘花すえつひなというのもまたこの花の異名である。末（先端）の方の花から順に咲き、咲くにつれて摘み取るというところから、この名がある。『源氏』で先の赤い大鼻の女を末摘花とあだ名しているのは、赤鼻と赤花とをかけたしゃれである。

ペニバナから、臘脂ろうじとも言われる紅粉べんじを製する方法は、『和漢三才図会』その他でみると、花卉を朝露のあるうちに摘み取り、水を盛った桶おけに入れ足で踏んだ後、布袋に入れて黄色い汁をしぼり捨て、それをこね、練って三センチぐらいずつの円餅まるもちの形にして、日光で乾かす。これが紅花餅または花餅といわれるもので、この形のまま売買し輸送した。紅粉にするには、花餅を機械にかけてその液汁をしぼり取り、その液汁に梅の実の酸すを加えると、濃い紅色を呈する。紅粉はこの液から精製する。特に大和名張川の溪谷、月ヶ瀬の梅の酸液がよいとされ、したがって京都産の紅粉が珍重された。月ヶ瀬は芭蕉にも郷里に近いなじみの深い土地で、紅花や花餅を見て感慨も深かったであろう。

紅粉で布を染めると、紅絹もみなどのような真紅の色に染まる。また顔料としては口紅や頬紅などにする。いわゆる京紅は上等品で、今でも店で売られ、祇園の舞妓が口紅に用いている。濃くつけると、黒み、光線のぐあいでは玉虫色の光を帯びて神秘的である。京紅は小皿などに塗りつけてあって、小

指の先で溶いて唇につける。今日の棒型のルーシュをぐいぐい引き回すのと違って、ずっとなまめいた美しいしぐさが見られる。紅粉はまた、頬紅にも用い、白粉にもまぜる。

昔の女性にとって、日常になくてならないものの一つがこの紅粉であったのである。女性美の演出者であったばかりでなく、女性の哀歎とともにあったともいえよう。

芭蕉は、ちょうど私たちのところと同じ季節に紅花の産地に来て、この花をつぶさに見た。

眉掃まゆはききを佛おもかげにして紅粉べんじの花

『おくのほそ道』にある芭蕉の句である。『曾良書留』には「立石の道ニテ」と前書してあり、真蹟泳草には「もがみにて、云々」とある。立石は立石寺（山寺）である。尾花沢の市中では紅花を見られなかったということかも知れない。いずれにしても尾花沢の清風に対する挨拶の心をこめてよんだものである。

句中の「眉掃まゆはきき」とは眉刷毛まゆはけのことで、女性が白粉を付けた後で、眉に付いた粉をはらうのに使う小さい刷毛である。

竹たけの管くだに兔うさぎの白い毛をうえつけたもので、まず白色の毛先のほほけた筆と思えばよい。「佛おもかげにして」とは、面影になってぼうと見えてくるようにして、の意。つまり紅花の咲いている姿は、眉刷毛を思わせる、眉刷毛のおもかげがある、ということである。実際に紅花の花冠は眉刷毛に似ている。紅花

から紅粉（臙脂）を、紅粉から、紅花とよく似た形の化粧道具を思いついた、という連想の道筋は明白すぎるくらいであり、その俳諧（滑稽）的な興じ方もまことによくわかる。

だが、それだけのことなら、説明的・常識的であり、談林的な遊びの笑いで、たいした曲もない句である。しかし、紅花の楚々として優しく、しかも艶冶な花容から、直観的に女性の姿を表象し、紅粉（臙脂）の表象を介することによって、女性の化粧に使う眉刷毛へと想を結んでいった、としたらどうであろう。美しい女が化粧している姿、柔らかい毛の眉刷毛、それを動かす白い細い指、——脂粉の香さえにおうようになまめかしい。眉刷毛の白と紅粉の紅色との対照、映発もなまめかしさをたすけている。

それに「おもかげ」ということはそのものの本来の意味が、恋いこがれて想う人の顔が幻となって浮かんできくるのをいうのであって恋愛的な気分をまよっている。それで化粧する女が、なんとなく物語などの中の想われ人らしく感じられてくる。紅花が古く和歌や王朝物語の中に登場していたという伝統を頭におけば、この思ひはまして深まらざるをえない。

国文学者でもあった歌人窪田空穂が、八十六歳という老齢に及んで執筆した名著『芭蕉の俳句』（昭和三十九年刊）の中で、この句について、

芭蕉という人に深く潜在している面を瞥見させられたような句である。句の形から見ても、眉はき、紅粉などに愛

情を感じ、関心を持っているようなしみじみしたところが、あり、うわずったものではない。俳諧の恋の座の心持と言えば言える、捨てがたい句である。

と述べているが、老歌人の味わいとり方の若々しさと深さは感嘆のほかはなく、これにまさる鑑賞は管見に入らない。

私たちの旅は、芭蕉と反対に、尾花沢に来る前に象潟に行ってきたのだった。象潟は松島と並ぶ奥州最大の歌枕であったので、芭蕉も特に志した所だった。行ってみた象潟の町は寂しげで、地面が砂っぽく、空気に湿気がある感じであった。芭蕉の訪れた時分には、底浅の海灣が広がり、松のはえた島々が点在して、松島と似た景勝地だったが、江戸時代末の大地震で土地全体が隆起し、入江が干上がった。丘と化した島々を残し、入江の跡は一面の田圃になっている。ものわびしいが、ただ鳥海山が、おそらく昔と変わらないであろう、雄大で美しい姿を東南方に見せているのだけが救いであった。

象潟の中心は、芭蕉も眺望を楽しんだ紺満寺で、その方丈前の、入江の跡を見はるかすタブ（楠の一種）の大樹の根もとに、

象潟の雨や西施がねむの花

の句碑が立っている。

寺の門前にも折りから合歡の花が咲いていた。そのほかに

もこの地方のあちこちの山野や村里にこの花は咲いていた。マメ科に属する喬木で、葉は一つの軸の両側に細かい複葉がびっしり付き、鳥の羽の一枚のように見える。この複葉が、夜になると両側から閉じるので、眠る木というのである。花は頭状花で、花弁が現れず、淡紅色の細い雄蕊が群がり立ち牡丹刷毛のような形である。離れて見ると、その花は煙っているようで、繊細な美しさがある。中国大陸の南部あたりを思わせる感じの花である。前にも書いたように、この地方に特に多い植物である。

紅花といいこの合歓の花といい、相似た美しい花が折りからこの地方を飾っていたという偶然は、旅人芭蕉に浅からぬ感銘を呼び起したであろうことはじゅうぶん想像される。

合歓の花の句は『おくのほそ道』の本文の中には、
象潟や雨に西施がねぶの花
という形でおさめられている。

句碑の形は推敲前のもので、「ねむ」は西施が眠るのと言いかけたのである。象潟の雨景を、雨中の合歓の花に代表させ、これを中国の薄命の佳人西施の悲しい姿に譬えたのである。和歌の伝統に染められた歌枕の聖地象潟に、意想外な中国漢詩文の世界を持ち出したのが、いってみれば一つの滑稽、すなわち俳諧なのである。

西施は春秋時代に有名な呉越の争いの檜舞台に登場する

女性で、越王勾踐が呉に一敗したのち、その國中第一の美女として選ばれ、呉王夫差に献じられた。夫差がその容色におぼれて国を傾けるのをねらった政略のいけにえにされたわけである。余りに美し過ぎた女が負った悲劇である。

芭蕉が西施を思い起したのは、蘇東坡の西湖をうたった詩に「水光潋灩晴偏好。山色空蒙雨亦奇。若把西湖一比西子。淡粧濃抹兩相宜。」とあるのに従ったのである。西子は西施のことである。この詩を頭においてみると、西施をここに持ち出した芭蕉の手柄はあまりいたことでない。

しかも、もとの句は「象潟の雨」という実象と、「西施がねむの花」という仮象（ねむの花は実象でもあるが、譬喻的仮象の趣もある）とが「や」のはたらきで対置され、単純なメタファ（暗喩）をなしているにすぎない。それが「象潟や雨に西施が」と直したことによって、面目は一新された。

「雨に西施が」となると、「雨」がはっきりと「西施」と「ねぶの花」との両方にかかるようになる。雨の中で（雨中に濡れているか、屋内にいるかにかかわらず）悲しげに目を閉じている窈窕たる美女の姿が浮かび、それがそっくり雨に濡れてしおたれ、うなだれたはかなげな合歓の花のイメージと一つになるのである。そしてその全体を総括して「象潟や」となり、その象潟は中七にある「雨」に影響されて、雨にけぶる景において現前するのである。象潟の雨景は、恨

むがごとく、魂を悩ますがごとく、寂しさに悲しみを加えた
と、女性にならずえながら芭蕉自ら文章中に書いたとおりで
ある。

それから、「雨に西施がねぶの花」となつて、「ねぶの花」
が完全な実象性において、象潟の雨景の象徴として生きる。
入江のほとりに雨に打たれているさびしい合歡の木とその花
がまざまざと見えるのである。

それはとにかくとして、私はこの句に描かれた嬋妍せんけんたる
美女のおもかげを追わずにはいられない。重い宿命を身に負
うて、消え入らんばかりに、なよなよと風にもえ耐えぬ風情ふうせい
をそなえつつ、それゆえに男の心をとるかしてやまぬあやし
い美しさを秘めた幽艶な美女のおもかげである。あわれ、こ
れ、永遠の薄命佳人そのものすがたでもあろうか。

『おくのほそ道』の跡を踏む旅の中から、花と女性の美し
さに触れて歩いてきた。それにもう一つ付け加えたいことが
ある。それは出羽三山に関係する。私たちは羽黒山にしか登
らなかつたが、しかし今もこう書いていると、私の脳裡には
羽黒の屋なお暗い杉木立の中にひっそりとそそり立っていた
雄偉な五重塔の姿が浮かんでくる。堂々と大きくて、飾り気
なく素朴で、千古の巨杉とみごとに調和した塔に私はいたく
感動した。しかし女性について考えているとき、なぜこの塔
が思い浮かぶのか不思議である。あの塔に何か女性的なもの

がひそめられているのだろうか。

塔は参道の登り口に近かつたから、そこから老杉に蔽われ
た千数百段の石段をあえぎあえぎ登った。途中から右手へは
いった南谷みなみたにの跡、——芭蕉が宿った別院のあつた跡は一面
の苔むした廢園になっているが、物音がみな吸われていくよ
うなその静けさは心にしみた。

石段の苦手の私は全く疲れ果てた。芭蕉は南谷の別院に泊
めてもらい、月山がつさんにも湯殿山ゆどのさんにも登拝した。当時の例で断
食、潔斎など行者と同じ作法のものとの巡拝だったから、余り
丈夫でない芭蕉はすっかり疲れた。随行した曽良の旅日記に
も「甚勞ル」とある。羽黒の石段だけで甚だ疲れた私も霧の
うすくこめた羽黒神社の境内ではやや元氣を取り直した。

境内に出羽三山の芭蕉の句が碑になっていた。碑面の字づ
らとは違うが『ほそ道』のままに書くこと、

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峰幾つ崩くづれて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂たもとかな

この最後の湯殿山の句についていささか感想を述べようと
思うが、その前に触れておきたいことがある。『おくのほそ
道』の本文に、月山から湯殿山へ下る途中の嘯目として、桜
の花のことがしるしてある。芭蕉が本文中に花そのものへの
実象を一主題としてしるした稀な例の一つである。

岩に腰掛けてしばし休らふほど、三尺ばかりなる桜のつぼみ半ば開けるあり。降り積む雪の下に埋もれて、春を忘れぬ遅桜の花の心わりなし。炎天の梅花ここにかをるがごとし。行尊僧正の歌のあはれもここに思ひ出でて、なほまさりておぼゆ。

この桜は、今日の研究では高山植物のエゾタカネザクラというものだそうだが、残雪の中に開くいじらしい桜花を発見して、芭蕉の感動もひとしおであったろう。場所がら禅宗詩の心なども織り込んでいるが、根本は「もるともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし」(行尊、金葉集)の歌をふまえた、和歌的伝統の「あはれ」の思いであったろう。つまり紅粉の花や合歓の花と同質の心動きと思考のである。

この雪中の桜花のくだりは、いわば連句における花の座に当たる構成と見てもよからうか。

『おくのほそ道』の構成を俳諧連句の歌仙もしくは五十韻の構成に擬したものと一つ一つ指摘する論者もある。それはいささか索強に過ぎるとしても、やはり少なくとも紀行作品にも連句に準じた変化をつけようと芭蕉が意図しただろうということも肯定できる。そうすると、このへんに花の座をおくことも首肯できるところである。

さて、湯殿山での句、

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

であるが、普通は次のように解せられている。ただこの解に従う限り、縁語の技巧が目につくだけで、湯殿という俗語の語感が低調にひびくし、いかにもつまらぬ句だと、一般にも言われるし、私もずっとそう思ってきた。

その解はこうである。三山のうちでも湯殿山は奥の院でもあり、とりわけて秘密の霊場とされ、山中の詳細は行者のおきてとして他言することを禁じられていた。芭蕉が「よつて筆をどめてしるさず」と書いているとおりでである。だから「語られぬ」は他言を許されない意である。「ぬらす袂」とは山の尊厳さに打たれて感涙にむせんだと解せられる。敬虔の念をよんだのである。もちろん「ぬらす」は湯殿(浴室)の縁語である。

ところが、この句の意味はそれだけではないようである。いったい、この山の御神体は赤っぽい巨岩と、その上方から湧く熱い温泉だということで、行者には素足で岩に登り、この霊湯を身に受ける行法があるそうだから、してみると「ぬらす袂」は実象とも考えられ、縁語の技巧を介して、こういう意味を重畳させたところに、この句の面白みがあるというべきだろう。

しかしまだそれだけでもない。湯殿山は、月山が「月の山」ともいわれるのに対し、「恋の山」といわれて、歌枕でもあった。宗旨は天台宗に属するが、芭蕉參拜から隔ること遠からぬ天宥てんゆう法印支配の時代までは真言宗だった。男女の

愛が昇華されて信仰と合するという考え方を持つ真言密教的な雰囲気がかつたと見るべきであろう。そこから「恋の山」の呼称も出たものかと思われる。「陸奥衛」に「靈地の奇瑞、人々踊躍の歓喜をなし、一度詣てては年々思をかくるが故に恋の山とは申也」と説いてあるが、信仰上の法悦を恋の喜びにならずにえての称呼であらう。

そこで、芭蕉の発句だが、「ぬらす」はいわゆる濡れ事（情事・恋愛行為）、濡れ場（恋愛の場面）などの「濡れ」に通じる。そこで、秘密の情事に濡れる、という意味がほのめくことばである。と同時に、袂をぬらすには涙にくれる意があるから、人に漏らせぬ恋の思いに涙する、という意味にもあわせて思ひよそえられる。

もっと言えば、湯殿（浴室）という語が日常語的にはたれば、湯殿に隠れての濡れ事（「濡れ」がそのものずばりと生かされる。）という連想もおのずから生まれてこよう。とにかく官能的でエロチックなものともずいぶん結びつきそうな契機さえ含まれる。

御山の神蔵にひれふすような、謹厳な、表面的な句意と似ても似つかぬようにも思われるが、むしろこの山の神秘的信仰の真髄は、男女の愛や官能の肯定というような点にあるとすれば、すこしも不逞でも不遜でもない私は思う。

恋の山での句らしく恋の心を含めているという見解は、旧注では例えば『笈の底』『朱紫』などに見られ、近代でも内

藤鳴雪の『俳句評釈』などにはこの面に触れているが、それより新しいものになるとこの見解を排除する立場に立つのが多い。ただ麻生磯次氏が『奥の細道講読』で「なまめいた含みがある」と述べ、また近く尾形仍氏が『おくのほそ道注解』の中で（昭和四十二年）、この句のもつ「俳諧的余意」として、この見解を取り上げたのが目につく。

私は、歌枕に対する芭蕉のかわらぬ態度として、湯殿山が「恋の山」であることを第一に意識に置いて句作りをしたに相違ないという見解をとる。曾良の日記の一部をなす「名所備忘録」にも「恋山」の名が「象潟」と並んで書き留められているくらいで、芭蕉の脳裡にであったことはまちがいない。恋ということばにも魅力を感じてそれを最大限に生かして句作りしようと、彼らしく寸々に腸をしぼったと推定しても、恐らく誤りはないだろう。だから、上に述べたように、意味を裏へ畳み込み畳み込んでいく手法を駆使することによって、あるていど成功に達した句だとする自信をもちだきえたのではなからうか。そしていわゆる俳諧（滑稽）というものの真髄はこのような手法の中にあるのではなからうか。

この句の季についてもいろいろ論議はあるが、「湯殿詣で」なり「湯殿行」なりをもって夏の季語とするのはすでに貞門以来のことだということと解決される（尾形仍氏掲書）。

この句を恋の余意ある句と解すると、芭蕉らしくなく、艶
っぽすぎるのではないかという人があるかもしれない。だが芭
蕉の連句作品を一見すれば、この疑いは水解しよう。

筆とらぬ物ゆへ恋の世にあはず 等躬

宮にめされしうき名はづかし 曾良

手枕にほそき かひな 脇をさし入て 芭蕉

これは『おくのほそ道』の旅中に巻かれた須賀川の三吟歌
仙の一節である。

上置きの干葉きざむもうはの空 野坡

馬に出ぬ日は内で恋する 芭蕉

これは後の『炭俵』にある。こうした艶な句は連句にはざ
らである。

こんど私たちの研究旅行でたどった芭蕉の足跡は、松島・
平泉という『ほそ道』全巻中での大ピークを受けた後、立石
寺・最上川・出羽三山という重畳たるピークを連ねて、さら
に次の象潟という大ピークに達するまでの、いわば圧巻とい
うべき部分にあたるのであるが、ここに大自然や人生無常に
対する深い感動にはさまれて、なぜ恋や女性の美しさに触れ
た句がちりばめられているのだろうか。

その答えは、前にもちょっと言ったとおり、一言でいえ
ば、構成・記述の変化の妙をねらったものである。

連句という花の座は、冒頭出発の条の仮象としての桜花か

ら始まり、白河の関の卵の花などから、例の紅粉の花・合歡
の花などの中に潜流しながら、月山の残雪中の遅桜をもって
哀れを極め、座に定まる。

恋の座は、紅粉の花・合歡の花の女性のおもかげに影を引
きながら、恋の山の句で一度定まる。さらにやがて越後路で
の七夕の星恋でほのめき、例の市振の遊女の話でクライマッ
クスを迎える。ここでは仮象ながら萩の花がとり出され、恋
と花とがみごとに結ばれ、造型される。

一家 ひとつや に遊女もねたり萩と月 はぎ

またさらにいえば、福井で隠士等栽を尋ねるくだりに夕顔
の花を点じて、『源氏物語』などの趣を描き添えたのも、あ
るいは恋と花の名残かもしれない。

それにしても、芭蕉は寂びに枯れず、思いのほかに情感が
若々しく、花や女性の美しさをも十二分に感受できたし、そ
れを匂うように表現するすべも心得ていたことを、ここで読
者とともに再確認できることをうれしく思う。

芭蕉の芸術の美しさは、紅粉の花、合歡の花とともに、私
の心の中で生涯花開きつづけるであろう。